

どうしたらいい!?

## カエルのために できること 伊東市立川奈幼稚園（静岡県伊東市）

[5歳児]

<事前の状況> 小学校の池でオタマジャクシを捕まえ、クラスで飼う。オタマジャクシに手足が生え、「見て！カエルになってきたよ！」と喜ぶ。本で調べ、「カエルになると生きた餌しか食べない」ことを知り、バッタ・ダンゴムシなどカエルの餌を確保し、飼育ケースに入れる。

	子どもの姿	援助(♡) 読み取り(※)
餌を飼う 気付き・疑問・考え合う	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バッタを入れてもダンゴムシを入れてもなかなか食べないことに気付いている子、気付いていない子がいる。</li> <li>・生きているチョウを入れようとする子と、それを止めようとする子が出てくる。「チョウを入れるのはかわいそうだ！罰当たり」「チョウは食べられたら死んじゃう」「どうしてチョウだけ駄目なの？そんなこと言ったらバッタだって同じだよ！食べられたら死ぬよ」「だってバッタはいっぱいいるからかわいそうじゃないよ」「バッタをあけてもちょっとしか食べないんだもん。お腹がすいているカエルはかわいそうじゃないの？」「うーん…かわいそうかも…」「誰も死ななくていい方法を考えよう。野菜で我慢してもらうとか…」と、話し合う。</li> <li>・図鑑で調べて、「カエルの前で生肉を振る方法」を試してみる。</li> <li>・肉をカエルが食べないことがわかると、「やっぱりバッタの方がいい」と虫を捕まえ出すが、カエルは食べない。</li> <li>・カエルになった時は丸々太っていたが、どんどん痩せて小さくなるのに気付く。</li> <li>・子どもの中に「このままではダメだ」という焦り感が生まれる。</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>♡チョウを入れることについて、お互いの話を聞く時間を設ける。自由に意見を交わせるよう、子どもの思いを受け止めながら、どうしてそう考えるのか、一人ひとりの生き物に対する意見を掘り下げて聞き出す。</li> <li>※いろいろな意見が出る中で、「生きるために生きているものを食べる」自然界の様子がなんとなくわかっていく。</li> <li>※子どもたちは、カエルとチョウ、どちらの立場にも立てるが、複雑な気持ちを味わう。一緒に過ごしてきたカエルと別れる決心はつかず、「何かまだできることがあるはずだ」と解決策を考えようとする。</li> <li>※カエルと他の虫の間で心が揺れ動く。複雑な気持ちや言葉にならない気持ちをみんなで共有しながら、「興味・好奇心」が、「命あるものへの愛着・思いやり」へと姿を変えていく。</li> </ul>
痩せていく 命を向き合う	<ul style="list-style-type: none"> <li>・痩せたカエルを観て話し合う。「こんなにやせっぽちになって…かわいそう」「逃がしても鳥や蛇に食べられて死ぬかもしれない」「逃がした方がいい」「蛇のいない所に逃がそう」「幼稚園にいても痩せて死んじゃうよ」「淋しいから嫌だ」「小学校の池に帰せばいいよ。カエルの友達もいるし」「淋しくてもカエルが死んだ時に淋しくなるよりいい。学校なら会いに行ける」と、いろいろな思いが出る。</li> <li>・小学校の池にカエルを逃がしに行く。「雨の日でよかったね」「池に小さい虫がたくさん浮いてるね。これでカエルもたくさん食べられるね」「友達もいるよ」「カエルって水の中だけじゃなくて草の上も歩くんだね」「鳥に食べられないかな」「淋しくなっちゃうね」「会いに来てもどのカエルが幼稚園のカエルかわからないかもしれない」「次に会いに来た時はすごく太っているかも」「食べられていないか幼稚園お休みだけ明日見に行ってみるよ」「元気でね」などと話す。</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>♡痩せているカエルの状態に気付いた子の発言をきっかけに、話し合う機会を設ける。なぜ痩せたのか、カエルはこのままで大丈夫だろうかなど投げかけながら、一人ひとりのカエルに対する思いや考えを引き出していく。</li> <li>♡子どもたちがお互いの話を聞きながら感じたことを話す姿を保育者も輪の一員となり見守り、耳を傾けていく。</li> <li>※「愛着」と「命ある者への思いやり」がぶつかり合う。カエルのためを思い、逃がす決意をするが、逃がしたことにより、カエルの生態についての新しい発見、驚きにつながる。「命ある者への思いやり」から「新たな好奇心・関心」へ、子どもの心がつながっていく。</li> </ul>

### ポイント

カエルの飼育を通して、子どもたちは飼育動物の命はもちろん、身近な生き物、特に餌になる生き物の命を考え現実を学ぶ体験をしています。また、命ばかりでなく、無意識ではありますが、飼育するのではなく「共に生きる」ことの視点で「どこでどのように生きていくことがいいのか」と思いを巡らし、生き物への思いやかかわりに関する考え方を深めています。このような「科学する心」の育ちがやりとりの中に表れています。